

誘惑を受ける

ルカによる福音 4:1-13

(そのとき、) イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せた。そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」イエスはお答えになった。

「『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。というのは、こう書いてあるからだ。『神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかりと守らせる。』また、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える。』」

イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」とお答えになった。悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

説教

「イエスのような人にあつたことありますか？」

いまならひどい問いだなと思いますが、神学生だったわたしはずいぶんとこの問いについて考え込みました。仮にこの問いが「悪魔のような人にあつ

たことはありますか？」という問いだとしたらわたしは悩まずにすみません。返事は即座にイエスだからです。まったく世の中には悪魔としか言いようのない人がたくさんいます。

四旬節の第一週ではイエスが悪魔から誘惑を受けるテキストをマタイ・マルコ・ルカのそれぞれの福音書から順繰りにとりあげます。今年はルカ福音書の順番です。振り返ってみたら、きょうのテキストは3回ほどセカンドチャーチの説教としてお伝えしていました。わたしはあと何回説教できるのかわかりませんが、一回一回を丁寧に説教できればいいなあと願っています。

ところで、いままではこの物語は誘惑モノだと疑わずに読んでいました。イエスは悪魔の誘惑に勝った、聖霊に満たされたイエスを見習ってわたしたちも日々の暮らしの中で（特に四旬節を迎えたいま）誘惑に負けないようにしましょうね、誘惑モノとしてこの福音を受け止めればこのような結論になります。理屈っぽい説教ならば三つの誘惑を分析的に解説します、あるいは、誘惑に負けそうになった（でも最後には勝つ）はらはらドキドキの例話をして信徒に訴える説教もあるでしょう。

でもこれをイエス対悪魔の誘惑物語ではなく、その裏にあるほかの物語として受け止めることができるのであればどうなるでしょう。

さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。そこで、悪魔はイエスに言った。

「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」（…中略…）悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。ルカ 4:1-13

あれっ、これって試練もの？「荒野の中を霊によって引き回され」聖書がいう荒野は神のおられるところですよ。霊というのは神とおきかえていいでしょう。イエスは聖霊に満たされた状況で荒野で悪魔の誘惑を受けるように神にしむけられた？これは神が悪魔の誘惑を利用してイエスをしごく、いわゆる試練ものなのではないでしょうか。文字通りに読んでいけば誘惑モノとしても

試練モノとしても解釈もできます。でもこの読み方ではいわゆる聖者伝説です。聖なるお方はあらゆる誘惑に負けることなく、神の与える試練にも打ち勝つ、そのお方こそイエス・キリストだ、でも聖書を伝説や神話としてではなく福音として受け止めているわたしたちにはどのような解釈が可能でしょうか。

福音書を読み進めればイエスは誘惑としてしりぞけた事柄を救いのわざとして実行していることがわかります。二匹の魚と五つのパンで5000人の空腹を満たし、目の見えない人、中風の人をいやし、狂人を正気に戻し、死人を生き返らせます。そしてご自身は十字架につけられ三日目によみがえり昇天されます。そしてイエス以降の世界に生きる私たちには教会を残されました。悪魔の三つの誘惑、パン（富）奇跡（宗教）支配（教会）をイエスは成し遂げているではありませんか。

ただ、イエスが弟子たちに託された教会は人間の生きる場所として十分に機能していません。人は教会から離れ続けいます。そして教会から離れた今に生きる人たちはイエスのパンを求める代わりにただの紙切れをお金としてあがめます。奇跡を信じる代わりに治療という名で放射線を浴びます。神の国ではなく地上の国家に帰属し、多くの血を流し続けながら民主主義国家を義としています。

イエスのような人が一人でもいるならばこんな状況にはならないはずですが。もしイエスが最後のアダムだとするならば世界はこんな様相にならない。ただ、こんなことをきょうのテキストから理解してもわたしたちの救いにはなりません。いったいイエスの荒野の四十日間はなにを意味しているのでしょうか。試練でもない、誘惑でもない、とするならば霊はなんでイエスを引き回したのでしょうか。また時が来るまでイエスを離れた悪魔は今いったいなにをしているのでしょうか。

人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生き

ることをあなたに知らせるためであった。申命記 8:3

イエスは悪魔の第一の問いをこのみことばで返答されました。ここからわたしたちが学ぶことはパンと人との関係ではなく、神と人との関係です。福音とは神は人をお許しになった、そしていまは人と共にいる、インマヌエルの神ということでした。ひとり子を信じるものは誰一人滅びない、永遠のいのちをえる、これが福音です。イエスご自身の意思ではないかのごとく「荒れ野の中を“霊”によって引き回され」たのは神こそが主であり、たとえ聖霊に満たされたイエスでさえも主の意思に従うことがまず第一であるということです。イエスに見習うところはここです。神に従うこと「人は主の口から出るすべての言葉によって生きること」わたしたちの救いはここにしかありません。四旬節のはじめに神人（しんじん）の関係をいまいちど新たにしましょう。
